

第4編 官庁・公共施設

第1章 北都留郡役所

明治11年(1878)12月、山梨県下4郡(山梨・八代・巨摩・都留)を9郡に分割、旧都留郡は北都留・南都留に分けられた。その各郡に郡役所を置くことになり、北都留郡では、その当時商業機能が集中していた上野原を抑えて、郡のほぼ中央、大原村猿橋に置かれることになった。

猿橋566・567番地、現在の猿橋中学校の位置である。

図4101 山梨県下の郡役所配置



郡市町村区画と郡役所所在地(明治19年:1886年)

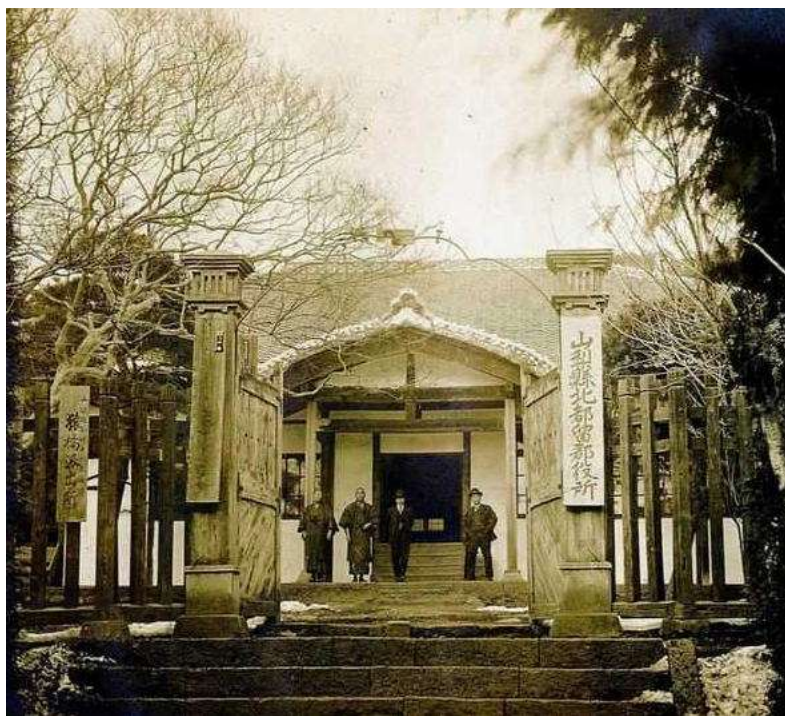
明治14年8月、庁舎を新築、敷地584坪には本館平屋:建坪96坪、土蔵:建坪7坪が建設された。

明治36年には郡長官舎、平屋22坪余を建設、大正3年、本館を瓦葺に改修している。

大正13年当時の在勤職員は次の通り。

郡長	1名
郡書記	10名
郡視学	1名
産業技手	1名
在勤県産業技手	1名
雇	1名
合計	15名

図4102 北都留郡役所



開庁当時の財政規模は

郡役所経費 14,511円

勸業費 1,199円

と記録が残っている。

このように小さな規模の郡役所ではあるが、その権威は絶大、郡の内外から会議・陳情・歎願などで訪れる人が多く、お膝元の猿橋の町に大きな経済的メリットをもたらし、別項で述べるように猿橋には旅館、料亭、カフェなどが多数立地し、明治後期から大正期にかけて空前の繁栄をもたらした。

第2章 猿橋警察署

1) 沿革

明治8年：脇本陣奈良七郎右衛門宅（藤田理髪店から岩井屋辺り）を仮用して警察屯所を設置

明治10年：名称変更で猿橋警察署となる。猿橋橋畔53番地に警察署新築完成

明治13年：猿橋警察署は南北都留郡を管轄することになり、谷村警察署は猿橋警察署谷村出張所となる。明治天皇行啓で召換。

明治14年：谷村警察署を開設。猿橋警察署は北都留郡管轄となる。

大正15年：上野原分署が独立。

昭和8年8月20日：新猿橋架橋のため取り壊し、小柳町に新庁舎を建設し移転。

昭和17年8月：猿橋から大月に移転、大月警察署となる。猿橋には巡査部長派出所を設置。

昭和23年：猿橋町に自治体警察署が置かれたが、29年7月再び大月警察署管轄となる。

2) 猿橋橋畔の時代 （北都留郡誌）

江戸時代、十王堂という小さな仏堂があり、正月や盂蘭盆には多くの参詣者を集めた場所だった。心月寺の管轄で、見捨地（免税地）だったが、明治8年の地租改正で官有地に編入された。この十王堂の仏像を心月寺に移し、巨木が鬱蒼としていた地に新庁舎を建設する事になった。

世話掛には奈良甚右衛門、奈良利一郎、長幡佐一郎、鈴木六右衛門が就任。建築用木材は賑岡村岩殿山の官民未定の土地にある桧を伐採し、賑岡村民の協力で桂川の流れを使って猿橋に運んだ。

明治9年3月着工、翌10年10月に完成。建築請負は鳥沢の大工桑山鋼蔵、内部造作は猿橋の建具鈴木捨吉で、総工費は1800円だったが、管内9ヶ村有志からの寄附金、および人夫延べ千人分の労力派遣を得て工費を大いに節約できた。

開所式には甲府から知事藤村紫朗ほか幹部が出席している。

図4201 橋畔にあった猿橋警察署



明治天皇は行啓の時、警察署に立ち寄り、ここで馬車に乗り換えた。（御召換記念碑）。

3) 小柳町へ移転

昭和8年、敷地の大半が新猿橋架橋用地にかかるため、立ち退きを余儀なくされ、小柳町249番地に鉄筋コンクリート作り2階建の庁舎を新築し移転した。

図4202 小柳町に新築移転した猿橋警察署 (現在の黒田医院)



4) 警察本署は大月へ移転、派出所に

第二次世界大戦の最中の昭和17年8月、猿橋から大月に移転して大月警察署となり、猿橋には巡査部長派出所が置かれた。当時の巡査部長派出所時代の写真は残念ながら入手出来ていない。昭和39年の東京オリンピック聖火リレーの引継が、巡査部長派出所前で行われた。派出所の建物の一部が見える。

図4203 派出所前の聖火引継

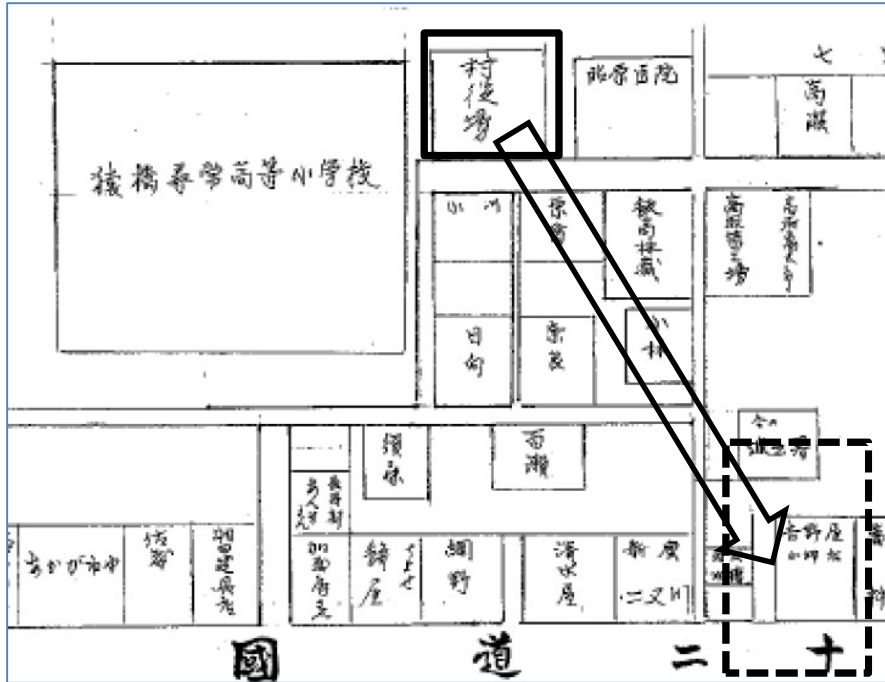


第3章 大原村役場・猿橋町役場

明治4年、猿橋村・殿上村・小沢村・朝日小沢村・藤崎村・小篠村が合併し、大原村が発足した。この村役場は、大正期の絵地図によれば、猿橋尋常高等小学校の東隣に置かれていたことがわかる。その後、明治22年、現在警察官派出所がある敷地に移設された。北都留郡誌によれば、ここが村道小沢線、藤崎線の起点となっている。

昭和10年（1935）、大原村が町制施行して猿橋町となり猿橋町役場となった。

図4301 大原村役場の移転



昭和12年、寿町の27番地にあった北都留甲斐絹同業組合が大月に移転し、その建物に猿橋町役場が移転した。

図4302 甲斐絹同業組合本部跡に移転



昭和29年8月8日、大月町・猿橋町・七保町・笹子町・賑岡村・初狩村・梁川村が合併して大月市（富浜村は9月8日編入）が発足し、町役場の使命を終え市役所支所となった。

第4章 猿橋郵便局

明治4年、郵便事業が創設され、明治6年頃までに山梨県下の主要な市街地に郵便局が開設され、さらに明治9年には主な郵便局網ができあがった。猿橋郵便局は明治5年に周辺村々に先駆けて設置され、明治8年10月16日郵便業務開始した。当時は現在の大月村も郵便担当区域だった。設置場所は不明であるが幡野氏が「中間屋」を営んでいた旧郵便局所在地（猿橋40番地）の可能性が大きい。

図4401 明治前期の山梨県下郵便逓送路4年



図4 明治前期の郵便逓送路

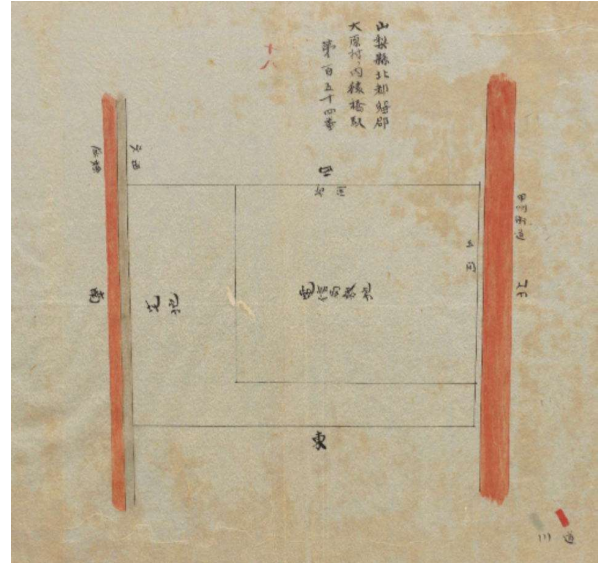
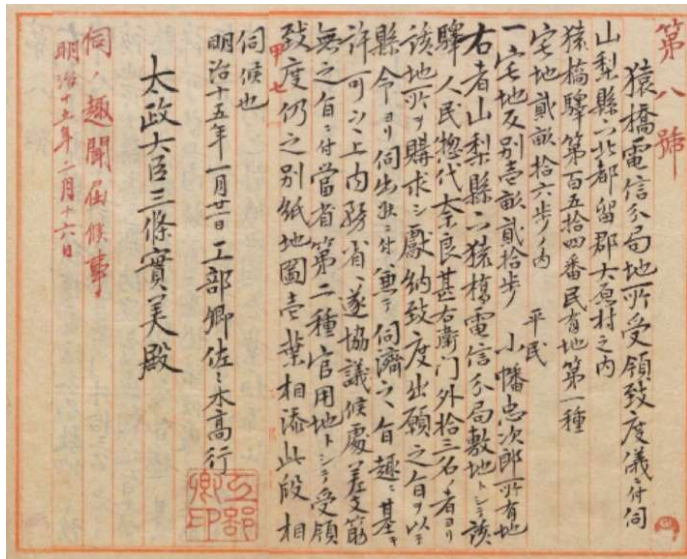
明治11年5月、東京四ツ谷から八王子を経て甲府への電信用電線を架設するにあたり、猿橋に電信分局を設けることになった。この計画によれば

県境から猿橋 4里27丁28間 電柱 327本

猿橋から甲府 12里19丁18間

この電信局設置にあたり、猿橋の住民、戸長（村長）から住民有志が電信局用地を提供する申し出があった。この用地献納の文書が残っている。

図4402 民間から電信局用地を寄付



これによると、住民小幡忠次郎所有（猿橋154番地）の2畝16歩（約76坪）の土地を奈良甚右衛門他3名が購入し国に献納したという。これは甲州街道に面する、現在山梨中央銀行猿橋支店がある土地である。

明治13年12月17日：為替事務開始。

明治14年：神奈川県との県境から327本の電柱を立て、猿橋電信分局が設置され、更に932本の電柱により工部分局に繋がれた。

明治14年12月5日：電信事務を開始。

明治18年3月17日：貯金事務開始。

このように民間から寄附された土地に建てられた猿橋電信局であるが、明治22年6月1日、郡内で唯一の三等局に昇格した大原郵便局と猿橋電信分局が合併し、猿橋電信分局は廃止となった。

明治29年の地図には、この地に郵便局があった事が確認できる。しかし大正7年頃とされる町並図（寿町）では、この地が精米所となっており、明治30年以降、大正7年以前のいずれかの年に仲町に新築した建物に移転している。そして電信局あとには新猿橋架橋により転出を余儀なくされた第十銀行が、この地に新築移転している。

明治25年10月1日 欧文電報を取扱開始。

大正6年5月10日、保険事務開始。

昭和40年代までの郵便局はいつ建てられたのだろうか？この猿橋郵便局は石造りを思わせる荘重な建物であったが、昭和15年の猿橋大火の延焼建物に猿橋郵便局が含まれているので、火災後に建て替えられたものと思われる。1階には郵便・為替などの窓口が並び、2階には右のような電話交換台が2・3台並んでいた。

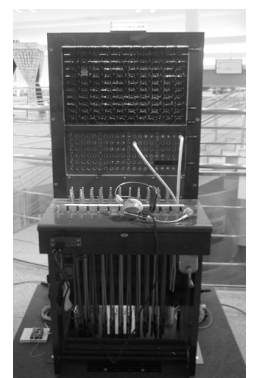


図4403 旧猿橋郵便局



図4404 裏側から見た郵便局



郵便物や電報の配達のため、多くの局員が働いていたが、全員が自転車であった。車はなかったし、車庫もなかった。局の裏側に自転車置場があり、数多くの自転車がならんでいた。

この郵便局はその後、殿上 423 番地へ移転した。

図4405 2018年までの局舎



図4406 現在の局舎



第5章 登記所（谷村裁判所出張所）

小柳の大布屋酒店のとなりに「登記所」があった。いつの間にかなくなっていたが、経緯を調べてみると次の通りであった。

明治19年に旧登記法が公布され、同20年から施行されたが、当初は各町村の戸長役場でその事務を行っていた。

図4501 山梨県下登記所配置図



図3 登記所の分布と管轄区域（明治19年：1886年）

明治32年の登記法施行に伴い、北都留郡役所の中に大原登記所が設置され、笹子村から梁川村までほぼ大月市に相当する区域を管轄した。

その後、谷村裁判所大原出張所と改称して北都留郡全体の登記事務を行うようになり、心月寺の中に事務所を置いた。

明治33年、谷村区裁判所大原出張所と改称し、明治36年に新庁舎を建築、更に大正6年11月、猿橋184番地に事務所を新築移転した。（活版所の隣り、昔千葉新聞店があった所。戦後になって、大月に移転した。）

登記所の跡地には現在の「酒の大布屋」が建っている。

図4502 大原登記所（絵葉書の一部）



第6章 猿橋駅 ～始発駅・終着駅だった「えんけう駅」

中央線は甲武鉄道として明治22年（1889）に新宿―八王子間が開通、明治34年（1901）、官営鉄道として八王子から延伸工事が始まった。同年8月に上野原まで、翌35年6月に鳥沢まで、10月に大月まで開通した。更に延伸して甲府まで開通したのは明治36年6月だった。

図4601 駅名「えんけう」で開業



猿橋駅は明治35年10月1日、大月まで延伸と同時に設置開業された。

大正4年9月、跨線橋が設置され、大正5年（1916）立売売店が開業した。開業当初は「えんきょう」（旧かな使いで「えんけう」）と呼称していたが、大正7年に「さるはし」駅と改称された。

第二時大戦中、跨線橋は解体、供出され、以降駅舎改築まで設置されることはなかった。

図4602 猿橋駅 旧駅舎



駅構内への入場は待合室経由だったが、出場は右側から建物内を通らなかった。

図4603 水彩画の旧猿橋駅舎



猿橋駅は東京と甲府を結ぶ中央線の重要駅として、機関車の折り返しを行う「機関区」が設置されており、昭和 30 年代までは駅舎の左手側にその名残があった。

明治 36 年、八王子機関庫職員が猿橋在勤として勤務してその業務が開始され、明治 42 年に機関庫建物（196 坪余 工費 28,444 円）が完成、甲府機関庫猿橋分庫が設立された。

機関車の配置は行わず、上下列車の点検その他を業務としたが、大正 2 年には機関士をはじめとする職員 40 人と機関車を配置し、機関車の折り返し運転を開始した。

電車と違い、蒸気機関車は後へは走れないため、始発駅・終着駅には機関区が不可欠であった。

大正 15 年、猿橋分庫を廃止し、甲府機関庫猿橋駐泊所を設置、機関車への給炭水と甲府出区で折り返しとなる機関車の転向作業等を担当した。

昭和 6 年、甲府機関庫猿橋転向所と改称した。

下は大正 13 年の官設鉄道時刻表から作成した猿橋駅の時刻表である。機関区・機関庫分庫があったので、「猿橋行」「猿橋発」の列車が存在した。

図4604 大正13年の時刻表

下り			上り		
始発		行先	始発		行先
飯田町	1 : 15	長野	長野	2 : 06	飯田町
飯田町	3 : 05	長野	長野	3 : 55	飯田町
猿橋	5 : 20 始発	塩尻	猿橋	5 : 00	八王子
与瀬	7 : 45	大月	長野	7 : 25	飯田町
新宿	8 : 32	甲府	名古屋	10 : 08	飯田町
飯田町	10 : 07	名古屋	塩尻	12 : 45	飯田町
飯田町	13 : 09	松本	塩尻	15 : 14	飯田町
飯田町	15 : 38	松本	名古屋	18 : 15	飯田町
飯田町	18 : 35	塩尻	甲府	20 : 08	新宿
飯田町	20 : 53	長野	長野	22 : 20 終着	猿橋

図4605 大正13年時刻表の一部

八王子	著	27.0	...
浅間	川	30.6	...
上野	瀬	36.5	...
四島	原	41.0	...
藤原	津	43.6	...
大初	澤	48.0	...
下初	橋	50.6	...
野方	月	53.2	...
鹿下	狩	55.9	...
下	子	59.8	...
野	野	63.5	...
沼	沼	67.1	...
山	山	69.6	...
和	和	72.9	...
府	府	76.4	...
府	府	80.3	...

大正13年の時刻表を見ると、猿橋駅に㊦のマークがある。ホーム上に洗面所があり、駅弁を売っていたことがわかる。また構内で駅弁を販売していた桂川館も、大月へ移転した。

しかし昭和初期から猿橋の相対的な地位の低下とともに様々な公共機関が大月に移された。

昭和11年、猿橋転向所が廃止され、猿橋駅からの始発・終着はなくなった。

図4605 昭和36年(1961)当時のホーム



第7章 五ヶ堰

図4701 五ヶ堰取水口



「五ヶ堰」は、寛永10年(1633)谷村藩主となった秋元泰朝により開削が始まり、寛文9年(1669)までに完成したといわれ、田之倉村で桂川から取水し、大月村・駒橋村・殿上村・猿橋村を通して桂川に落ちる全長2里(8km)の用水路である。5ヶ村共同で作った用水路からこの名がある。

大月から猿橋の間はほぼ甲州街道の脇を流れているが、猿橋の町中で奇妙な迂回が見られる。

江戸時代の猿橋宿の絵図でもこの迂回が見られる。即ち甲州街道に沿って東行した流路が八百六商店の所から北に折れ、桂川の岸壁に沿って東行、カメヤのところで街道沿いに戻っている。

図4702 五ヶ堰の流路



なぜこのような迂回流路ができたのか。これは甲州街道の高低差によるものである。

昔、活版所付近から坂下旅館の辺りまでは急傾斜で、自動車通行が少なかった頃は雪が降れば手作りのスキーを楽しめた程であった。

坂下旅館は文字通り坂の下にあったからで、明治時代には坂上を名乗る家もあった（登記所があった辺り）。この急坂の街道沿いに五ヶ堰を通すと急流となってしまう、水量が多い時には坂の下で洪水騒ぎにもなりかねない。このため、迂回させてゆるい傾斜で東行させ、カメヤの所で街道沿いに戻している。

この五ヶ堰は田畑の灌漑用水が主であるが、地域住民は洗濯などの生活用水としても使う重要な水路であったが、その使命を終えた現在も静かに流れ続けている。

ちなみにこの用水の最終が「思い出の滝」となって桂川に戻っている。

図4703 五ヶ堰であそぶ子供達



写真の場所は猿橋郵便局前辺り。国道は舗装前の砂利道。当時、五ヶ堰はこのように水量が多かった。